

日本のバスケットボール競技力の向上にむけて

龍谷大学松畑ゼミ H

○松本 栄嗣 山本 達也 中井 達也 清水 翔太
藤田 雛子 上澤 勇貴 村本 衛

1.緒言

2016年9月22日に国立代々木競技場第一体育館でB.LEAGUEの開幕戦(アルバルク東京 vs 琉球ゴールデンキングス)が行われたこと、2017年6月9日に国際オリンピック委員会(IOC)で2020年東京オリンピックの正式種目として、3人制バスケットボール「3×3バスケットボール(男女)」が追加採用されることが決定し、2020年東京オリンピックのバスケットボール競技では、5人制の男女、3人制の男女(3×3)の4種目が実施されることが決定したことは記憶に新しいと思う。今回、私たちがバスケットボールという競技に着目したのは、これを機にバスケットボールの認知度がさらに高まり、より人気が出ると推測したからである。

2.現状

(1) 戦績

ア.オリンピックでの戦績

男子は1964年東京オリンピックにおいて10位が最高である。しかし、男子は1976年モントリオールオリンピック以降のオリンピックに出場することができていない。

女子は1976年モントリオールオリンピックにおいて5位が最高である。しかし、女子も1976年モントリオールオリンピック以降は、1996年アトランタオリンピック、2004年アテネオリンピック、2016年リオデジャネイロオリンピックの3大会しか出場できていない状況である。

つまり、オリンピックではメダルを獲得できていないのである。

イ.FIBAワールドカップでの戦績

男子は1967年ウルグアイ大会以降、1998年ギリシア大会、2006年の日本大会しか出場しておらず、メダルを獲得したことがない。また、2006年日本大会は開催国枠での出場である。

女子は1975年コロンビア大会で準優勝という結果を残しているが、それ以降、1986年ソビエト連邦大会、2006年ブラジル大会を除いて、出場はしているが、メダルの獲得はない。

(2) 世界ランキング

男子日本代表48位、女子日本代表13位、男子ユース日本代表は27位、女子ユース日本代表11位、すべてを合わせたものでは16位となっている。

3.改善すべき点と提言

私たちは (1) 競技人口、(2) 指導者、(3) コート、の 3 点を軸に論じていく。

(1) 競技人口 (協会の競技者登録数を競技人口とする)

年度		チーム加盟数	競技者登録数(3×3除く)
2016年	平成28年	34,218	637,249
2015年	平成27年	34,302	636,987
2014年	平成26年	34,313	632,661
2013年	平成25年	34,284	619,823
2012年	平成24年	34,154	613,784
2011年	平成23年	34,016	615,458
2010年	平成22年	34,189	616,289
2009年	平成21年	34,191	616,839
2008年	平成20年	34,068	618,255
2007年	平成19年	33,999	618,222
2006年	平成18年	33,974	612,304
2005年	平成17年	33,617	604,673

図 1 公益財団法人 日本バスケットボール協会 登録者推移

まず、日本バスケットボール界の人口不足についてである。競技人口は年々増加しており、2016 年は 637,249 人となっていが、人口の 0.5%程度の割合にとどまっている。日本で最も競技人口の多いサッカーには及ばない。(サッカー〈2016 年〉: 937,893 人・0.7%)

全世界の男女総計競技者人口で比較すると世界バスケットボール連盟には 4 億 5000 万人の登録があり、世界最大の競技人口となっている。(サッカーは 2 億 6000 万人) バスケットボールは世界的に見ても男女共通で人気があり、野球、サッカーに比べて女子の比率が高いことも世界的に競技人口が多い原因であると考えられる。

では、なぜ世界的には最大人口のバスケットボールが日本においてはサッカー人口

よりも少ない現状にあるのだろうか。その原因はバスケットボールの日本での人気に関係していると考えられる。日本では野球、サッカーがプロリーグを設立し、人気を博していることに比べ、バスケットボールは 2016 年に B.LEAGUE が開幕されるまで、企業チームとプロチームが混在する NBL（ナショナルバスケットボールリーグ）と、プロチームのみで構成される bj リーグという二つのリーグが存在していたものの、リーグが 2 つに分かれているなどの問題もあり、新リーグ設立に時間を要したために人気が上がらなかった。B.LEAGUE は、日本バスケットボールをより発展させ、より良い未来を築くために以下の 3 つの使命を果たすとしている。

①世界に通用する選手やチームの輩出

日々、切磋琢磨する土俵を作り世界に通用する選手やチームを輩出することです。それが B.LEAGUE の使命であり、日本のバスケットボール競技力の底上げ・競技人口の裾野の拡大を図ります。

②エンターテインメント性の追求

B.LEAGUE では徹底的にエンターテインメント性を追求して参ります。勝っても負けても試合を見に行き行って楽しかった。「今日のあのプレーは良かったね」「今日のあの演出は良かったね」と言ってもらえるようなエンターテインメント性を重視した演出に取り組んで参ります。

③夢のアリーナの実現

体育館ではありません。「アリーナ」です。夢のアリーナを作り、地域に根差したスポーツクラブになっていく、非日常の空間を存分に楽しめる…試合を楽しむだけでなく、スポーツを通して人生を楽しむことができるような環境を提供し、B.LEAGUE を盛り上げて参ります。

しかし、これらの使命を果たすには、まず B.LEAGUE を観てもらわないといけない。現在、B.LEAGUE は地上波ではなかなか放送されない。では、どうすれば観てもらえるのだろうか。

ここで、私たちはインスタライブや LINE LIVE で試合を配信することを提言する。これは、放送や配信のように収益があるわけではないが、B.LEAGUE が今まで Twitter、Facebook、Instagram などの SNS を積極的に活用してきたことを生かしてより多くの人に観てもらおうという狙いである。観てもらえれば、きっとアリーナに足を運んでくれる人が増えるだろう。

(2) 指導者

日本の指導者は、その時のベストにしあげてしまうという指導方針になっており、将来的に見た選手の育成が出来ていない。海外では無論プロに入ってからがベストになるように指導されている。その為か、若い世代の世界的に見た日本の戦績は悪くない。やはり、指導者の指導技術の差も大きく影響している。過去に、ある高校の練習時間が

45分で長い日でも90分、土・日は体育館が使用出来ないという環境の中、強豪校を倒して、インターハイに出場したということもある。やはり量より質で強豪校に多くみられる長いランニングや反復練習ではなく、短時間でもプレーのシステムを確認して効率よく練習をする。今の日本には将来的に見た指導が出来る優秀な指導者の存在が必要不可欠である。

ここで、私たちはコーチライセンスを保有するすべての人を対象とした機能解剖学や生理学などの勉強会を無償で開催することを提言する。これらを学び、実践することができれば、今よりも効率的な指導、トレーニングを行うことができるようになる。また、選手がケガをした際も、より適切で迅速な処置が行えるようになる。

(3) コート

バスケットボール強豪国のアメリカには公園や住宅街にもバスケットボールのコートが多くあり、子供の頃からバスケットボールをする機会が多いのに対して、日本では見かける機会がない。存在してもゴールだけで出来てもシュート練習やハーフコートでの勝負だ。ストリートバスケも日本ではみる機会もなく、アメリカほど恵まれた環境にもない。アメリカのストリートバスケではコートをかけて常にハングリー精神をもっている。育つ環境にも差が生じている。見る機会も多いので真似をしてプレーシテクニクを吸収出来る。プロのプレイヤーもストリートでプレーしたことがあるというのも普通だ。身近に感じられるようなことでいえば、日本で「あの公園で昔練習していた人がプロになったよ。」という話を聞いたことがあるだろうか。これだけでも大きな差を感じる。

ここで、私たちは、小中学校の体育館の常時開放を提言する。もちろん、授業や部活で体育館を使用するときには解放できないが、使用していない時間は必ずあるので、その時間にバスケットボールに触れたり、ボールを投げたりすることでコート不足は少なからず解消されるだろう。

4.まとめ

このような政策は他スポーツにも共通して言えることであるので、これを基に他スポーツの活性化についても考えていきたい。

<参考文献>

FIBA basketball NIKE FIBA WORLD RANKING

<http://www.fiba.basketball/rankingcombined>

公益財団法人 日本バスケットボール協会 登録者推移

<http://www.japanbasketball.jp/jba/data/enrollment/>

公益財団法人 日本サッカー協会 (JFA) データボックス

http://www.jfa.jp/about_jfa/organization/databox/player.html

総務省統計局 人口推計 ー平成29年9月報ー

<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/201709.pdf>